

知多地域でのとげなし単為結果性ナス「試交 17-22」の栽培経過

～品種にあわせた栽培技術構築で、収量と収益の増加を目指す～

森岡 咲妃（農業総合試験場病害虫防除室
前・知多農林水産事務所農業改良普及課）

【2024年7月掲載】

【要約】

知多地域の施設ナス産地では平成30年作まで主に「千両」が栽培されていた。令和1年作から、愛知県農業総合試験場が育成した新品種「試交 17-22」が試作され、〔とげなし単為結果性〕による作業性の良さや、「千両」と比べ秀品率が高く、収量は同等であったことなどが評価され、令和5年作から全面導入に至った。「試交 17-22」は1月以降、葉の黄化や着果過多による草勢低下などが起こったが、追肥量及びかん水量を増加することで、2月以降は安定して収量を得ることができた。一方、灰色かび病に罹病しやすい傾向にあるため、農業改良普及課では対策の検討と実施支援を行っていく。

1 これまでの試作経過

知多地域では、主に東海市と東浦町で施設ナス栽培が行われ、主要品種は収量性は高いが、とげがあり着果処理が必要で作業性に難がある「千両」であった。

平成30年作頃に、〔とげなし単為結果性〕ナス「とげなし輝楽」が試作され、とげがなく着果処理が不要なため作業性が評価された一方、「千両」より収量が劣り、黒紫程度が淡かったため、導入に至らなかった。その後、令和1年作から新品種〔とげなし単為結果性〕ナス「試交 17-22」が試作され、作業性の良さに加え、「千両」と同程度の収量及び黒紫程度であったこと、「千両」以上の秀品率が生産者に評価され、令和5年作から全面導入に至った。今回、「試交 17-22」の特徴を紹介するとともに、知多地域での栽培経過及び今後の課題について説明する。

2 試交 17-22 の特徴

「試交 17-22」の特徴としては、〔とげなし単為結果性〕であり、管理作業でとげが刺さることがなく、かつホルモン処理などの着果作業が不要なため、省力的である。果実は長卵形で、果実の揃いや光沢が良く、収穫期間を通じて安定して品質が良いため秀品率が高い。また、側枝数が「千両」と同様に多いため、側枝数が少ない「とげなし輝楽」と比較して収量性が高



写真1 定植初期の「試交 17-22」



写真2 「試交 17-22」果実

い。黒紫程度は、「とげなし輝楽」より濃く、漬けた場合では、黒紫色が抜けないため漬物加工適性がある。定植初期の木姿は立性であり、親葉は「千両」と比較して大きい傾向にある。また栽培初期の収穫果実は太めの長卵形となる傾向にある。(写真1、写真2)

3 知多地域での「試交 17-22」栽培経過

知多管内の施設ナス栽培では、8月中旬から10月中旬にかけて定植を行い、10月中旬から7月上旬にかけて収穫される。一部ほ場では環境モニタリング装置を活用しており、モニタリング結果を参考に温湿度管理やかん水の実施及び炭酸ガスの施用を行っている。

令和3年作から令和4年作にかけて、生育、収量の調査を行った結果、「千両」と比較し「試交 17-22」で秀品率が高く、厳寒期の収量が多くなった。一方で、2月から開花数が増加し、全ての花が実をつけて肥大するため、着果過多となった。その結果、草勢が乱れ、収穫できるサイズまで肥大せず、収量が低下した(図1)。また、1月頃から葉の黄化が目立つこと、定植初期や作終盤の高温期に花落ちが増えることがあった。

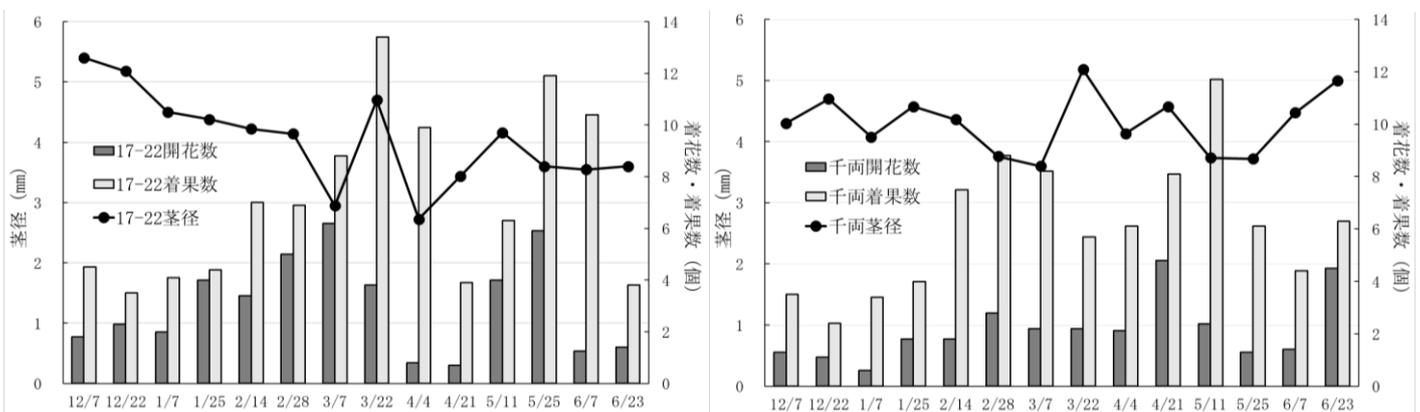


図1 調査期間における茎径、開花数、着果数の推移(左:試交17-22、右:千両)

得られた結果を踏まえ、各生産者で①追肥の量や頻度を増加、②かん水の量や頻度を増加、③日射量が増える2月中旬までに余分な脇芽の整理などの対策を行った。また高温期の花落ち対策では、訪花昆虫の導入やホルモン処理を実施した。その結果、2月以降も安定して収量を得ることができた。また1月頃の葉の黄化と高温期の花落ちについても改善された。

4 今後の課題

「試行 17-22」はとげがなく、ホルモン処理が不要なことから作業性が良く、秀品率も良いため、生産者の期待は高い。しかし、令和5年作において、「千両」と比較して「試交 17-22」は灰色かび病が発生しやすいことが確認された。また、2月中旬の摘心について、脇芽整理及び1芽1果切り戻し摘心に労力がかかるとの生産者意見がある。今後、農業改良普及課では、灰色かび病対策の検討や、省力技術の導入による作業の効率化で、収量増加による収益性の向上を目指していく。